日本スポーツ産業学会第3回学会大会〔講演抄録II〕

「スポーツ科学におけるスポーツ産業学の構想」

The position of Sport Industry Science within Sport Science
—Development of a Theoretical Framework

Prof. Dr. Herbert Haag (オリンピック研究所, ドイツ)

産業化社会の発展とスポーツ産業の発展が著しい。産業化は消費者のニーズ志向あるいはサービス志向のもとで、柔軟性を持って発展しなければならない。産業化社会におけるスポーツは、プロスポーツ、教育機関におけるスポーツ、クラブスポーツ、商業的スポーツ、そして個人スポーツといった5つの視点からスポーツ産業との関係、スポーツ科学との関係が検討される必要がある。

1. 基本的課題

この講演の目的は(1)新しいスポーツ科学の領域であるスポーツ産業学の重要性の説明、(2)スポーツ科学におけるスポーツ産業学の位置づけ、(3)スポーツ産業学の構造の解明にある。これらの課題に答えることにより、スポーツ産業学の理論的枠組みが構築できるであろう。スポーツ科学には、産業とスポーツの関係や協力といった実践に対する責任があり、それは科学的な立場から扱われなければならない。すなわちスポーツ産業学は、“理論に基礎づけられた実践と実践に依拠する理論”を志向しなければならない。

2. スポーツ科学の知識体系

スポーツ産業に関連するスポーツ関連のプロダクトには、スポーツクラブなどのようなマーケットプロダクト、スペクテータースポーツのような消費次元のプロダクト、観客のカタルシスなどのようなマーケットプロダクトに関連する潜在的なプロダクト、メディアや広告の権利売買あるいは利潤獲得の機会などのような資本次元のプロダクトが考えられる。スポーツ産業学とは、スポーツと産業の発展のための説明を試みる科学的研究やその成果の体系である。ま

たスポーツ産業学の機能は、理論の歴史的側面、比較論的アプローチ、そして現実的側面からのアプローチや将来展望へのアプローチという4つの次元から、そのメタ理論を検討することによって明らかにされるであろう。

スポーツ科学は、既存の応用科学から派生する理論領域、スポーツ科学におけるトピックを扱うテーマ領域、スポーツ関連研究の研究方法の3つの内容から構成される。

既成の理論領域には、スポーツ医学とスポーツバイオメカニクスからなる自然科学領域、スポーツ心理学、スポーツ教育学そしてスポーツ社会学からなる社会・行動科学領域、スポーツ史とスポーツ哲学からなる歴史・哲学領域がある。一方、社会のサブシステムから派生してきた新しい理論領域には、スポーツ情報学、スポーツ政治学、スポーツ法学、スポーツ施設と設備・用具に関する理論、スポーツ経済学などがあげられる。さらにスポーツ環境学、スポーツ経営学、スポーツ栄養学などもより発展する必要がある。

スポーツ科学の固有なテーマ領域には、運動学、プレイ論、トレーニング論やコーチング論そして指導理論がある。またスポーツ科学の一般的なテーマ領域としては、スポーツと運動能力、音楽と運動、スポーツとレジャー、スポーツと健康、社会集団におけるスポーツ、スポーツとマスメディア、スポーツと攻撃性などがあげられる。もちろんその他にもスポーツと性、スポーツと年齢、スポーツと芸術などを加えることができる。

スポーツ科学の研究方法の検討では、いわゆる“Kiel Model of Research Methodology (KMRM)”の論理的な過程を経なければなら

ない。それは①科学的知識を希求する理論かスポーツ科学の機能的側面に言及する理論かという理論的背景を選択する科学論的な戦略、②記述の方法、相関的方法、実験の方法という研究手法、③変数の設定やデータ収集、実験方法などの研究デザイン、④観察、質問、内容分析などデータ収集の技術、⑤解釈学的分析や統計学的分析などのデータの分析手法、⑥理論の実践への転化という6ステップから構成される。これらはスポーツ産業学をスポーツ科学に位置づける際に重要となる基本的手続きである。

3. スポーツ産業学の位置

スポーツ産業学は、その他のサブシステムと関係をもつがゆえにスポーツ科学の一般的テーマ領域に属すると考えられるが、中でもスポーツ施設や設備・用具、スポーツと経済、そしてスポーツとレクリエーション、スポーツと健康、スポーツとマスコミというテーマ領域が重要になろう。

スポーツ技術は施設や用具に影響を受け、またスポーツの発展が施設用具、さらには生産技術の開発や進展を刺激する。その意味でスポーツと施設や設備・用具の理論とは密接な相互関連があり、スポーツ産業学の重要なテーマ領域を構成する。

スポーツ経済学は、経済学の応用的な下位領域であるとともに、スポーツ科学の一理論領域でもある。例えば、選手用のウェアやシューズ、施設など物的な経済的支援とスポーツクラブやスポーツプログラム、スポーツイベントの提供など人的サービスの発展の中にスポーツの商業主義化やプロ化と経済との関連が看取できる。スポーツは経済システムの目的達成に多様に使われるため、スポーツの経済的側面は新しいスポーツのイデオロギーと解釈することもできる。それゆえスポーツの経済的貢献や協力に関しては慎重になるべきであり、商業的スポーツプログラムの経済的目的といったミクロ経済学的問題、経済とコマーシャリズムといったメゾ経済学的問題、そしてスポーツ経済システムな

どマクロ経済学的問題のような社会的、哲学的問題を扱わねばならない。

スポーツとレクリエーションに関しては、ターゲットグループと参加者、社会文化的要因、参加目的、活動内容や方法、指導方法などが一般的なテーマとなるであろう。“レジャータイムスポーツ (LTS)”は目的、形態、必要要件、結果、経費などの点でトップレベルのスポーツとは異なったものである。さらにスポーツの補償機能や再生産機能はスポーツの持つ機能の側面であり、レジャータイムスポーツの社会的側面や自己実現などの諸機能が無視されているという問題もある。

スポーツと健康は、スポーツ産業学を構成するテーマとなろう。ヘルススポーツは個人の健康状態の回復や維持を意図する全てのスポーツを指すが、個人的観点、あるいはトップレベルの選手の立場からみたスポーツと健康、スポーツクラブや教育機関におけるスポーツと健康など、体系的な理解が必要となる。

スポーツはマスメディアの助けによって、スポーツ観戦や受動的で間接的なスポーツ参与を促進してきた。スポーツジャーナリズムは全てのマスメディアに関連しており、それはスポーツと政策、教育、文化そして経済との関係について報道責任がある。スポーツ産業学におけるスポーツとマスメディアのテーマとしては、スポーツに志向したマスメディアの伝達形態、送り手と受け手との関係、マスメディアと言語、情報化社会とマスメディアなどが考えられる。

4. お わ り に

以上のように、スポーツと身体活動に関連する多様な産業に及ぼす影響を扱うスポーツ産業学は、スポーツ科学における新しいそして重要な一般テーマ領域として位置づけられる。さらに研究方法論の精緻化によって、スポーツ産業学の構造化が可能になろう。スポーツ産業学会は、その社会的経済的影響力を考慮すると、その責任と機能は多大なものであるといわねばならない。